地方卽ち古代のランパカ Lampaka に出てゐるもので、此の事實は簡單ながら問題を解決するに足るものと思はれる。比較的容易な道があつて、其の後用心深い玄奘法師も之れを通り、又これあるが爲現に多くの隊商が新しい車道を通らうとしない、その同じ道をアレキサンダー大王の軍隊が通り得なかつたと考へられるものであらうか。

そこで、どう考へても大王も法師と同一の道を辿つたものらしく、前者は富源征服の爲、後者は精神的同化の爲、各々目指す大印度の國境を乘り越えた、その大事決行の場合に兩者の道筋が一致したに相違ないと思はれるが、此の一事は實に肝心要の所で、特に明かにする必要のある所である。ラムガーン Laŋghân 若くはニングラハール Ningrahâr に着けば愈ゝイラン高原に聳ゆる山々を降りて、もう印度には入つた譯で氣候も俄に違ひ、冬でも不思議に暖く、夏の暑さは格別である。棕櫚が繁りオレンヂも林を爲してゐる。田には米をつくり畑には甘蔗を植えてある。鳴く maïna 跳びはねる猿、見る物聞くこと總ての樣子が違つて來る。流石にバーブール帝も「新世界の入口」